



がんちゃんのIPE通信

IPE (Intellectual Property Education)

19年度前期における知的財産教育の進展状況----光と影

知財教育実行委員長・地域連携推進センター教授 佐藤 祐介

19年度前期も終わろうとして、知財教育の未来に希望を抱かせる明るい面と、暗い影を落とすかのような面とが入り交じっているように感じられます。

まず、4月よりスタートした1年生向け全学共通科目の「知財入門」は、より多数の受講生の出席を可能とするように同じ内容の授業を月曜の午前と午後とで行うものですが、合計500名近くの学生が受講し、盛況を極めています。また、全学共通科目である「情報基礎」と「市民社会と法」の授業の1コマをお借りして行う「特許交渉と紛争の現場」および「著作権と情報」も前期については計7クラスが終了し、500名以上が受講したことになっており、後期3クラスも合わせると実に700名程度の学生が受講する勘定になります。さらに、8月の集中講義「知財ワークショップ」についても、現地に出かけるバスの関係等から30名に限定しているところ、47名の応募があり、抽選で絞らざるを得ない状況になっています。

一方で、9月に予定していた特許庁、知財高等裁判所、企業知財部および特許事務所を訪ねる知財現場見学会（東京）は、参加学生に対する経済的な補助打ち切りの影響で人気を失い、実施が危ぶまれています。また、知財関連の講演会として、Lexis-Nexis講習会や特許データベース講習会、講演会「大学の知をどう売り込むか――メーカー知財部からの体験的考察」を行いました。聴衆の集まり具合は盛況というにはほど遠いものでした。

ところで、知財教育に関して盛り上がりが増えているという点については、全国的にもそういえます。知財教育をテーマとした現代GPの応募数を見てみますと、他の環境教育などのテーマについては倍増しているにもかかわらず、横ばいか減少気味であり、知財教育に関しては取りやめの方向も取りざたされている有り様です。

これらから（岩大だけでなく全国的に）、今の取り組みでは、入門的なものには一定の吸引力がみられるもののそれ以上に引きつけるなにかが欠けていると思われまます。知財劇場の観客（学生）は「知財とは何だろう」という興味から入り口で様子をうかがっているだけで、こうした観客を劇場のなかに引っ張り込めないという状況でしょうか。

ではどうしたらよいのか？考えざるを得ません。原因はおそらく知財はやはりビジネス的なものの色が濃いため、そういったものとは無縁の教育を受けてきた学生にとって縁遠いと感じられるからかも知れません。とすると、消費者教育などの市場経済社会での「生活の知恵」的な教育の一環として位置づけたうえで教育実践すればよいのではないのでしょうか。その点では、「知財ワークショップ」の方向は悪くないものと思われまます。

地域では、環境に配慮しつつ経済的自立を基本とした「まち・むら興し」に取り組んでいます。産業（ビジネス）振興を中心とした活動が行われていて、そのビジネスを保護・促進するために知財の活用が考えられています。そのため、身近な地域興しを実体験する「知財ワークショップ」に参加すれば、自ずと地域のビジネスに違和感なく入り込み、知財の活用を考えるようになる、というのが狙いだからです。

知財教育では、起業家教育や地域興しなどに場を借り、気がついたらビジネスのなかで考えていたという体験こそ大切であると思われまます。



現代GP活動予定

8月4日、7日～9日
知財ワークショップ
4日 ガイダンス
7日 現地の見学・調査
8日 調査資料の整理、ディスカッション
9日 プレゼンテーション

8月27日～30日
「知的財産権特論」開講

9月3日～6日
「特許法特講」開講

10月15日 16:30～19:30
知的財産権特別講義
講師：富沢知成弁理士
対象：知的財産権に興味ある学生
場所：教育学部講義室（予定）

現代GP活動記録

7月13日
専門教育科目「造形特別演習（デザイン）」にて弁理士による講義
講師：佐藤浩司（プレシオ国際特許事務所）

岩手大学知的財産教育実行委員会

〒020-8550
岩手県盛岡市上田三丁目18番34号

知財教育推進部事務局

電話 019(621)6749
FAX 019(621)6749
Email: chizai@iwate-u.ac.jp

ホームページもご覧ください。
<http://chizai.iwate-u.ac.jp>

岩手の“大地”と“人”とともに

【全学共通教育科目】夏期集中講義

「知財ワークショップ」が開講されます！

昨年度より開講された「知財ワークショップ」が今年度も開講されます。すでに募集定員30名を満了し、以下のキャッチ・フレーズのもと、葛巻・遠野の現地調査に赴き学生達に環境と知財について考えてもらいます。

遠野&葛巻 地域づくりに学ぶ

「地方部の小さな街での取り組みから、 地域づくりの知恵を共に学んでみませんか。」

わが国の国土は広く多様性に富んでいます。その土地の自然、歴史、文化、人を育みながら個性豊かな多くの町々が形づくられてきました。

「岩手」には、厳しい自然・地理的条件の下で、その風土を最大限に活用し、地域おこしに取り組んでいる町がいくつもみられます。

地方部での地域おこしの試みは、限られた資源のなかで、如何に生活を豊かにしていくか、試行錯誤の積み重ねから生まれてきた知恵の宝庫だといえるでしょう。

“すぐそこ”身近な町での地域づくりへの取り組みから、地域を支える知恵、生きていく知恵を学んでみませんか。

近年、「夕張」が注目を集め、過疎地方部の小さな町の持続可能性について、関心が高まってきました。わが国は人口減少時代を迎え、衰退の一途を辿る集落での生活機能の確保や、地理的に不利な条件にある地域への振興策は、「岩手」をはじめとする地域の将来を考える上で重要な課題の一つになってきています。

葛巻・・・年間50万人が訪れる、ミルクとワインとクリーンエネルギーの町

葛巻は、高原の大規模風力発電、公共施設の太陽光発電、酪農糞尿からバイオガス、間伐材から木質チップ、グリーンツーリズムなど、地域資源を活かした循環型社会づくりに取り組んでいます。くずまき高原牧場、くずまきワイン、グリーンテージくずまき、第3セクターが先導する官民あげての地域づくりが進められています。

遠野・・・「遠野物語」民話の町が仕掛ける“ブランド戦略”

遠野では、商工会が中心となって、遠野ブランド「トナーゼ」を立ち上げました。積み木に絵を描き込んだ「もくもく絵本」、米と牛乳を主成分としたジュース「ピアンラルク」、天然の海藻から抽出した健康食「およねはん」などなど、遠野らしさにこだわる地元産品を認証し、全国への発信をはじめています。

(キャッチ・フレーズ：工学部准教授 南正昭)

全学的知的財産教育：「著作権関連の調査報告（2006/12/22）」

調査担当者:福永良浩、佐藤祐介

全学的な知的財産教育（特に著作権分野）の普及のため、「社団法人 著作権情報センター（CRIC）、社団法人コンピュータソフトウェア著作権協会（ACCS）、社団法人 日本映像ソフト協会（JVA）」を訪問し、調査をおこなった。各協会ともに国内での普及活動はもちろんのこと、著作権がまだ普及していない発展途上国への支援なども行っており、大変興味深かった。さらには、無料で配布している資料（パンフレット・ビデオ）なども小学生・中学生・高校生向けのものであり、知的財産立国として著作物の保護という観点から、低学年からの知的財産教育は大変重要かつ推進していく必要性があると感じた。特に、現在の著作物に関してはデジタル化されたものが多く、その取扱いや法制度も常に変化していく反面、法制度を掻い潜った犯罪も多発している。これらの社会的な問題も情報化という中で、個々のひとりひとりが正確な情報をもとに十分な理解とモラルをもって認識していくことが重要であると思われる。

今後、現代GPの全学的知財教育を通して、各協会から講師を派遣してもらい、著作権に関する様々な事例からモラルを培えるよう、全学共通教育「情報基礎」などの講義の一部で活用して頂けることを期待しております。また、各協会からの資料（無料パンフレットや教材）などは、法学研究資料室（人社1号館5F）に保管しておりますので、是非ご活用頂ければ幸いです。

(文：大学教育総合センター講師 福永良浩)